
異名の境界線

有沢 美弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異名の境界線

【Nコード】

N7378E

【作者名】

有沢 美弥

【あらすじ】

知らない世界で自分の名前を忘れてしまった少女。そこで出会った少年もまた、自分と同じだと知る。名前を思い出せば元いた世界に戻れると知るが…。

第一章

空は満天の星。

吹く風は爽やか。

「…つと…」

見渡す限り、砂漠。

長い黒髪の少女。

その瞳もまた、漆黒。

「えー…つと…」

人種は日本人。

歳、十五。

名前、クロウ・ライファ・フロウ。

「あれ…？私なんでこんなところに居るんだっけ…」

重たい腰を上げる。

現状を把握したい。

その時

「姫様っ！！」

「は…？」

まずは、驚く。

馬に跨がった少年。

黒い装束に長い青銀髪がよく映える。

少年の名は、フロー。

ライナ・フロー・サイル。

「あ…つと…姫様で、私のこと…？」

ライファは自分を指差して言った。

すると、少年は急いで馬から下りて来た。

「ライファ様、いかがなさいまし…た…」

彼はライファの瞳を覗き込み、僅かに目を見開いた。

「どうか…したの？」

ライファは、そっと彼の頬に触れた。

「あ…いや…すみません…」

フローは急にはっとしたようにライファから離れた。

「あの…あなたの名前は？」

「姫様。いつもの姫様じゃないね…」

彼は鋭い目で見た。

「ねえ、ここはどこなの！？私はここでどういう存在なの！？教えてー！！」

ライファはしがみつくようにしてうなだれた。

突然の事で、頭が混乱している。

このままでは、自分の名前さえ忘れてしまいそうだ。

「お願い…教えて…」

「クロウ・ライファ・フロウ」

「え…？」

ライファは顔を上げる。

少年は低い言葉で呟いた。

「あなたの名前です。俺はライナ・フロー・サイル。フローです、姫様」

「姫…様…？」

「ここはあなたの国です。ライファ様」

「私の…？」

すると、フローは軽々とライファを抱き上げた。

「んな…っ…」

「城に帰りましょう。それと…」

フローは声を一段と低くした。

「俺以外の前では、王女・ライファ様でいてくださいね」

「……………」

ライファは言われるままに従った。

「おお、ライフア。ずいぶんと帰りが遅かったのう」
城に入った途端、男がライフアに抱き着いて来た。

「な……」

悲鳴をあげそうになったが、何とか堪えた。

「も…申し訳ありません…」

震える声で言ったはいいものの、声が上がらず。

「ふん…いつもと違うな、ライフア。どうした？」

「…っ!？」

何と返答してよいのか迷っていると、フロアが助け船を出した。

「王様。姫君はお疲れのようなので、休まれるのが一番かと」
頭を深々と下げた。

「それもそうだな」

ライフアは失礼しますと言って、広間を出た。

「こちらでございます、姫様」

桃色のドレスを纏った、侍女らしき女性が案内した。

しかし、部屋の変わり目でフロアは止められた。

「どうしてフロアは…」

ライフアは思わず声をあげたが、侍女は不思議そうに首を傾げた。

「男性が後宮に入れないのはいつものことではありませんか」

「あ…っ…そうだったわね…」

慌てて取り繕うが他人の目にはどれほど不審に見えたか。

だが、ライフアの不安はさらに膨れるだけだ。

しかし、フロアは大丈夫と頷いた。

仕方なく侍女に導かれるまま、奥へと進んだ。

案内された部屋は、限りなく王室と言う言葉が似合った。

「それでは、ごゆっくりおやすみください」
侍女はそう言ってお下がった。

「……………」
いきなりこんな所に連れて来られて、どうしたらいいのか。
大きな硝子張りのドアを開けると、月はもう高くまで上がっていた。
ライファはそのままバルコニーに出た。

その時

「な…っ！！」

第一章（後書き）

ブログ作りました。

`http://sizinnoyakata.judgem.jp/`
です。

日々しらぶらとしています。

よかったですぞ。

第二章

「なななな……………」

ライファは声にならなかった。

ここは三階か四階だろう。

しかし、バルコニーの手摺りにはフローがぶら下がっていた。

「何で!？」

「静かにして、姫様。侍女が来るよ?」

「あ…っ…」

慌てて口を紡ぐ。

「俺さ、運動神経抜群なんだ。だから、いつも来てた」

「と…とにかく中に入って。話を聞かせてよ」

ライファはフローの腕を掴むと、バルコニーに引き込んだ。

「姫様つてやつぱりおてんばだね」

フローはバルコニーに座って、からからと笑った。

「中に入って」

ライファが促すと、フローは今までとは違う、ずっと冷たい笑みを

浮かべた。

「それって命令?」

「…え?」

予想外の言葉に、ライファは目を丸くした。

「それは、姫様という立場からの命令?」

すると、ライファはフローの頬をつねった。

「ひへっ!？」

「冗談じゃないわ!!何が姫様の立場よ!!私は私よ!嫌なら嫌と言いなさい!!」

フローは呆然とした。

だが、フローは可笑しそうに。

「何よ」

「姫様だなと思つてさ」

「は？」

ライファは目を丸くした。

「んー…魂は同じだな」

「訳のわからない事を言つてないで、早く入つて」

きい…と、きしんだ音を立てて扉が開かれた。

中に侍女はなく、静まり返っていた。

「とにかく座つて。話を聞きたいの」

ソファーに腰を下ろしたフローを一別してから、自分も座つた。

「ここは、フロウ国。姫の国です。あなたは第一王女。下に妹君が一人居ます。」

名前はアル様。今この宮殿にはいませんけど」

「そこまでは分かつたわ。でも、私が聞きたいのはここがどこか、ということよ」

「だから、フロウ国」

「違つわ」

「ほんとだよ」

「そうじゃなくて…」

第三章（前書き）

お久しぶりです。

なかなか気むずかしい二人です。

第三章

拉致のあかない問答に、ライフアは長い髪を掻き上げた。その仕草に、フローは目を軽く見張る。

「何？」

「いや…。そんなに自分の立場が知りたい？」

「当たり前でしょ」

ライフアはじろりとフローを睨んだ。

このやけに遠回しな言い方は何だ？

「歪みだよ」

「は…？」

「時と場所の歪みに挟まれたんだ」

「なにを……」

訳の解らない事を。

「俺も別世界から来た。そして、この世界に存在したフローという人間と替わった。ライフア、自分の名前を思い出せる？」

「え…？ライフア……違っ……」

問われて初めて気付いた。自分の本当の名前、性格には和名が分からない。思い出せないのだ。

自分は日本人である。それなのに『ライフア』なんて英名のはずがない。

「俺だって本当は『フロー』じゃない。名前があるはずなんだ。それが解らない」

フローはそう言って立ち上がる。青銀の髪が月の光に輝いて反射した。

「忘れてはいけません、ライフア様。あなたはライフアではない。忘れてしまったら、この世界に取り込まれてしまいます」

いきなり改まった言い方になったフローは深々と頭を下げた。

「それでは、姫君。私はこれにて」

「待って!!」

ライファはドアから出ていこうとするフローを引き止めた。

「あなたはこうしてこの世界に吞まれないの!?!方法を教えて!!」
ソファアから勢いよく立ち上がると、フローに近づこうとする。しかし、慣れないドレスの裾に足を引っ掛けた。

「っわ!!」

バランスを崩し、倒れかかる体をフローは軽々と受け止めた。

「名前、だよ」

「え…?」

抱き留められた形のまま、彼は小さく囁いた。

「名前……」

「決めるんだ」

「え?」

「自分の名前だ。自分で決めればいい」

「私の名前?自分で決めるの?」

「そうだ」

ふうん、と少し黙りフローから体を離す。

「じゃあ、ライファでいいわ」

「え?」

ライファは裾の広いドレスを膨らませるように座り直して、フローと向き合った。

「私の名前よ。十分だわ」

「そう…?」

フローはそう言って立ち上がった。

「それでは今度こそ、おやすみなさいませ」

ぱたりと閉められた扉をしばらく見つめ、ライファは大きく息をついた。

そして、天を仰ぐ。

「私は私よ…誰でもないわ……」

第四章

これは、夢だ。

『どうかしたの？……………』

声が、聞き取れないの。
大事な部分が。
私の、名前。

『ほら。行こう』

呼ばれてる。
呼ばれてる。

「私」が呼ばれてる。

『目を覚まして。追いてくわよ』

待って。
待って。

私が戻るまで、待ってて。

「姉さま…？」

乳発色の視界に、見慣れない輪郭が現れた。
思わず目をこすったライファは、それをしっかりと見た。

「あ……えと……」

「まだ寝ぼけているのですか？リオです」

「り……お……」

何度が瞬きを繰り返して、彼女をしっかりと見た。

「大丈夫ですか？姉さま」

リオに聞かれて、初めて気づいた。

「ここはベッドだ。」

自室のベッドに横たわっていたのか。

「リオ……お水くれる……？」

「はい。少し待っていてください」

そう言っただけで、リオは部屋から出て行った。

ライファは喉がからからだった。

どうしてか、体が重い。

きつと熱があるのだろう。

すると、きいという音と共に扉が開かれた。

「リオ……？」

そう尋ねたライファは目を見開いた。

「ご無事ですか、ライファ様」

「フロー……」

横になったまま彼に目を向けると、フローは安心したように息をついた。

「よかった……倒れていたと聞きましたので」

他人行儀に敬語を使ってくるフローに少し憤りを感じる。

自分にとって、真実を話し合える人なのだからもつと普通に接して欲しいと望んでしまう。

だが、王宮ではそれは彼にとって良くないことなのだろう。

「あら。来ていたの？」

リオが片手にグラスを持ち、扉からひよっこり顔をのぞかせた。

「リオ様。お久しぶりです」

「そういえばそうね。フローったら姉さまにばかり構うんだから」

くすくすと笑って、リオはライファにグラスを渡す。
受け取ったライファはそれをゆつくりと口に含んだ。
予想外に冷たいそれが、体を通るのが分かった。

「そういえば、フローは私の安否を確認しにきただけ？」
ライファがちらりと見やると、フローは頭を横に振った。

「いえ。ご報告があつて……」

フローの声色が下る。

ライファには何かあつたと予想するのは容易かった。

大事な話だと思い、体を起こした。

「南町の山下で騒ぎがあつたそうです」

「騒ぎ？」

「はい」

フローは手に持っていた地図をライファに見せた。

「ここです。民の話だと、怪物のような人間だつたと話しています」

「怪物のような人間？結局はヒトだつてこと？」

「おそらくは」

第五章

地図に没頭していたライファは、ふとリオを見上げた。

「そう言えば、リオ外出中じゃなかったの？」

「姉さまが倒れたと聞いて、急いで戻ってきたんです」

軽くため息をつきながら、リオはライファのベッドに腰を下ろした。そこで初めて気が付いた。

リオの瞳は、緑だ。

「ライファ様？」

「え…？あ、うん」

「どう思いますか？」

「南町ね…視察に行きたいのは山々なんだけど…」

「駄目です」

その意見はあっさりリオに却下された。

「……よね」

すると、部屋の扉の外でリオを呼ぶ声が聞こえた。しびしび退室するリオを、ライファは呼び止めた。

「後で、もう一度部屋に来てもらえる？」

「分かりました」

一言だけ答えて、重い扉を押して出て行った。

ふう、とライファは息をついた。

「ね、フロア。質問があるんだけど」

「昨日から質問ばっかりだな」

普通の口調に戻ったフロアは大きく背伸びをして、窓際に移動した。

「で。なに？答えられる事なら答えるけど」

「うん。どうして私の部屋には侍女がいないの？」

「姫様が追っ払ったから。あんまり鬱陶しいの嫌いでしょ」
「そういえば。」

誰かに手を煩わせるのは苦手だし、好きではない。

それは、前の『ライフア』も同じだったのか。

「だから言ったでしょ？だれも気づかない。姫様が入れ替わったことを」

「なるほど……」

「唯一と言えば、ここの国の記憶くらいだな」
そうして振り返った彼の瞳は…

「蒼……」

髪の色も、瞳の色も、蒼。

透き通って、美しい。

「フローは、ニホン人？」

「……そうだけど」

「今の間、何？」

「気のせい」

第六章

「ね、フロー。私ってそんなに変わり者だったの？」
「だった？」

フローは眉根を寄せた。

ライファはむっとして、講義した。

「今の私も変わり者だって言いたいなの？」

「充分」

「しっ…失礼な！」

思わずライファは自分の枕をフローに投げていた。

だが、彼はいとも容易くそれをよけてしまう。

ますます怒りの膨らむライファだが。

「元気になつたな」

初めて見る、彼の本当の笑顔。

柔らかい、優しい。

「ど…え？」

顔が一気に熱くなったのを確認したライファは手で顔を覆った。

(なっ…私、どうしたんだろ…)

頭に血がのぼって、くらくらする。

妙に恥ずかしいのは、何故？

「姫様、また熱？」

「何でもない！気にしないでっ！」

近づいてくるフローを片手で払う。

少し戸惑った感じだったが、小さく笑って言う。

「食事を持って来させましょう」

敬語。

この立場では。

「姫」と「召使い」。

そんなの、嫌だ。

「フロー……」

呟くと、小さな返事が返ってくる。

「大丈夫ですよ。私が、お守りいたします」

違うのに。

本当に望むものは、守ってもらおう事じゃないのに。

彼は、気づいてくれない。

私は一体何を望んでいるの？

「姉さま、リオです」

「ああ。入って」

ライファは机に向かったまま答えた。

リオは黙々とペンを走らせる彼女を不思議そうに見ている。

「何をしているんですか？」

「んー？勉強」

すると、後ろで盛大にリオが吹き出した。

「そんなに可笑しいの？」

「ええ。だって姉さま、お勉強は嫌いだっておっしゃっていたのに」

「少しはしなきゃ。そうだ、リオ。あなた、武術はできる？」

「はい？」

ライファは一つ背伸びをすると、椅子から立ち上がって今度はベッドに腰を下ろす。

リオも隣に腰を落ち着けた。

「私も南町に行きたいの。少しは戦いたいわ」

「……私よりも姉さまの方が出来ますのに、私にお尋ねになるなんて。どうかしたんですか？」

「え……と。あ、そう。リオは誰に手解きしてもらってるのかなって」

「私ですか？フローですが」

「そうなの？」

「姉さまもそうでしょう？」

「あ…うん。そうだったわね」
「まずい。」

確かにこの国での記憶が乏しい。

このままではリオに気づかれるのは時間の問題だ。

第七章

ここに来て、少しだけ分かったことがある。
本当に「ライファ」の周りには人がいない。

唯一の侍女は、レイという少女。

とても気が利き、気さくな子であった。

「姫様、ご気分はいかがですか？」

「大丈夫よ。ありがとう」

彼女はこの国でも珍しい銀色の髪の持ち主だった。

……フローの青銀髪・青眼も充分珍しいのだが。

ライファはレイの髪が大好きになった。

優しく、柔らかかな色。

それは彼女の性格そのものだった。

「今日は面白いお菓子が手に入ったのですよ」

嬉しそうに膝の包みを開けた。

その中に入っていたもの。それは。

「あら、和菓子ね」

「ワガシ？何ですか？」

レイは不思議そうな顔をした。

同時にライファも不思議に思った。

それは確かに和菓子である。

とても凝った、花の菓子。

「これは、昨日城に来た使者様が置いていってくださったものです。

私も王様に頂きましたが、とても美味しかったです」

「そう。それは良かったわ。じゃあ、私も頂こうかしら」

「はい。あ、それでは紅茶でも…それともコーヒーがよろしいですか？」

「そうねえ……」

すると、ライファの声に重なる声があった。

「姫様には紅茶がいいだろう」

それは扉の前に立っていたフロアだった。

「フロア様。お帰りなさいませ」

「南町はどうだった？」

ライファは、自分が動けない代わりに彼を使いに出した。

レイはライファの部屋にあるちよつとした台所に向かっていく。

だが、途中で立ち止まりフロアを見返る。

「フロア様も紅茶、お飲みになりますよね？」

「ああ。頂こう」

相変わらず体調を崩し気味のライファはベッドに体を起こしていた。その隣にある椅子に腰を掛け、フロアは現状を語った。

「やはり駄目ですね。私が二日間滞在しましたが、奴は出ませんでした」

「そう…。やっぱり私が行った方が分かりやすくもいいのに…リオと父様が止めるんだもの」

「それは仕方がないですよ。早く体調を直してください」

「分かってるわよ」

ふう、と息をついたライファは和菓子をかじった。

懐かしい味が、口に広がる。

「姫様、紅茶です」

「ありがとうございます」

ライファは笑顔でカップを受け取ると、暖かい紅茶を飲んだ。

和菓子に紅茶なんて、あまりない組み合わせだ。

フロアも同じ事を思っているのか、じっとカップの中を見つめていた。

青い瞳がとても悲しい。

「フロア？」

「あ…すみません。少し疲れているみたいで…。部屋に戻って休みます」

「そうね。それがいいわ」

腰を上げたフローは、ポケットから何かを取り出した。それは、硝子で出来た髪飾りだった。

幾重にも滴形の硝子が重なって花の形を成している。

「お土産です。帰りがけに買ってきました」

「ありがとうございます。とてもきれい。大事にするわね」

頭を下げた扉から出て行くフローを見つめていたライフアは、レイに呼ばれて我に返った。

「姫様。そういえばリオ姫様の噂ってご存じですか？

「は？」

「リオ姫様とフロー様が恋仲だった」

第八章

「嘘！」

思わず叫んだライファは、あわてて自分の口を塞いだ。
レイも驚いて目を丸くしている。

駄目だ。

何が？

「ひ、姫様……！？」

慌てたようにレイはライファに近づく。

気づけば、頬に冷たい何かが伝う。

「え……？」

己の指で冷たいものに触れ、初めて気づいた。
泣いている、と。

「姫様……」

途中まで来たレイが止まる。

先ほどの驚きや慌てた様子からうってかわり、彼女の目に映るのは
恐怖。そして軽蔑の視線。

ライファ自身も分かってしまった。

「れ……い……」

一瞬、後ろから押されたようになった。

ぐらりと、体が傾く。

頭が痛い。

「姫様っ！」

レイの叫び声が、妙に遠く感じる。

「姉さまが!？」

レイの言葉に耳を疑ったりオは思わず転びそうになった。

度々ライファが倒れる騒動はあったが、今回は尋常ではない。

ライファが部屋の鍵をかけて、外に出てこなくなったと言うことだった。

なんと丸一日何も食べていないとのことだった。

「父様は何て？」

「放っておくと…でも、このままでは……」

「分かったわ。私が説得してみる」

リオがライファの部屋に向かう途中、フロアと合流した。

「姫様の所に行く途中ですか？」

「ええ。フロアもでしょ？」

「はい。王様から説得して欲しいとのことのお言葉でしたので」

結局心配しているのかとひとりごちたりオだったが、ライファの部屋の前まで来て悠長な考えは一気に吹っ飛んだ。

扉の前には数人の侍女、そして兵士。

「ライファ様は？」

一人の兵士に尋ねたフロアは、よりいっそう重く見える扉を見上げた。

「駄目です。全くお返事もございません。このままでは……」

「分かった。リオ様、許可を頂きたい」

「何のでしょう？」

「バルコニーからの強行突破を」

そこに居た全員が息をのんだ。

だが、フロアにとっては慣れた事である。

しかし、こんな公衆の前でしてしまえば処刑になりかねない!

だから妹君のリオに許可を請う。

「許します。王家の名にかけて」

「有り難うございます」

フロアはそう言うと、階段に向かった。

ライファはベッドの上に横たわっていた。

動く気もしない。

疲れと、劣等感。

一体何に？

「ばっかみたい……」

長い黒髪を投げ出したまま、カーテンの閉めてある薄暗い部屋。

それと同じように、ライファの気持ちも重い。

好き。

好きだったんだ。

彼の笑顔も。

困った顔も。

ひよつとしたら、あの冷たい笑みも。

離したくない、と。

『身分の差を分かって下さい』

誰かが言っていた気がする。

身分。

身分ってなに？

それは……………。

「姫様っ！！」

第九章

ライファがゆっくりと頭を上げると、カーテンの向こう側に影が映る。

「フロー…?」

弱々しく呟いたライファはそっと窓に向かう。

カーテンに手を当てると、ふわりと全体が揺れる。

「姫様、どうかしたのですか!？」

「フロー…」

再び彼の名を呼ぶと、今度は額をカーテンに押し付けた。

「姫様…」

「敬語…」

「え…?」

フローは驚いたような声を上げた。

それを聞いたライファは、もう一度呟く。

「敬語…やめて…」

ぎゅっとカーテンを握り締める。

今にも流れそうな涙を必死に堪える。

すると、ガラスがこん、と叩かれた。

「どうした?」

「あ…」

ライファは、言葉に詰まった。

何を言っつてよいか分からない。

「大丈夫か?何があった?」

優しい声だ。

劣るような、なだめるような。

「フローは私とリオ、どっちが大切…?」

「え?」

「フローは義務で私を守ってくれるの？心配するの？」

「…違う。俺は姫様が大事なんだ」

重い声が響く。

それは本当なのか。

分からない。分からないが。

「私は『ライファ』じゃないわ」

鋭い言葉で確認を促す。

すると、フローは含み笑いのようなものを返してきた。

「姫様は姫様だ。他の何者でもない。そうだろう？」

そうして、思い出した。

そうだったはずだ。ここに来てから、ずっと。

自分は自分だと。

そうでもしないと『自分』が消えてしまいそいうで、恐かった。

「この世界は、いずれ破滅する。名前に違いが出るためだ。自分が誰だか分からなくなつて、そして壊れる。もう症状が出ている人もいる。早くしないと、大きな反乱が起きてしまう」

まさに、今のライファの状況。

「自分の居た場所に帰りたいたらどう？」

ぴくりと、肩が揺れる。

そつとカーテンを、開ける。

安心したようなフローの表情。

更に鍵を開け、風を受けたライファは光りの無い瞳で彼を見つめる。

「どうして……………」

風に流れる、彼の青い髪を手で一筋すくう。

「フローは私と同じ場所から来たのよね…？」

頷き、肯定するフローにライファは穏やかに、しかし決定的な言葉を投げる。

白刃の煌めきを、持った言葉。

「だったらどうしてあなたの髪は青いの？瞳は…。あなたは、私と同じじゃないわ」

フロアの瞳が、凍り付く。

一瞬の事だった。

更に強く吹いた風が、ライフアの手から髪を奪い去る。

「あなたは嘘を、ついている」

第十章

長い長い沈黙。

フローは何も言わない。ライファも、無言で彼を見ている。ただ、明らかにフローは動揺していた。その証拠に、視線がさまよっている。

「答えて」

ライファの口調は強かった。

それに呼応するように、二人の髪が舞い上がる。

やがて、フローは俯いてしまった。女性とも見惚れる美しい容姿が、今はとても哀しい。

「嘘だったのね。今までの言葉も、態度も全て！」

フローの肩を強く掴む。

堪えきれない怒りが、込み上げる。

「何か言いなさいよ……言い訳も出来ないの!？」

無言を押し通そうとするフローに、更なる感情を覚える。

ライファは頭に血が上って、顔が熱くなるのを感じた。否、熱いのは目。

「違っつて言っつてよ!嘘でも、言い訳でもいいから!!黙らないで」

「……………否定は、しない」

乾いた音が響く。

ライファは、自身の手も痛いほど強く平手打ちを喰らわせた。肩を上下に揺らし、息を切らせてフローを凝視していた。

「最低」

視界が、霞む。

それに気付かないフリをして、続ける。

「あなたが私を早く元の世界に帰したかった理由がよく解ったわ。本物の『ライファ』を取り戻したかったのね。別に、私の事なんて最初からどうでもよかつたんでしょ？」

フローは、弾かれたように顔を上げた。

「それは違う」

「違うないわ。私が邪魔だったのよね？そうよね、私と『ライファ』が入れ替わらなければずっと一緒に居られたのに」

「話しを聞け……」

今度は、フローがライファの肩を掴む。

だが、ライファはその身をよじって逃れようとする。

「嫌よ！フローだって、早く私なんて居なくなればって……」

不意に、視界が遮られる。

青い瞳が、眼前に在った。

ライファの言葉を遮るように、フローは唇を塞ぐ。

「……………っ！」

キスをされたと理解したライファは、思い切りフローを突き飛ばした。

「な……っ……………」

真っ赤になったライファは最早思考能力を失っていた。

そんなライファを、フローは優しく抱きしめる。

「話しを、聞け」

再び言葉を繰り返す。

そして、ようやく黙ったライファは彼の鼓動を聞いた。

第十一章

「違う…違うんだ」

ライファはじつとフロアの声に聞き入った。

「本当は…ライファなんて人物は存在しなかったんだ」

目を見開く。

彼は何を言っているのだろうか。

「じゃあ…リオは？私の妹、じゃ…ないの…？」
とぎれとぎれになって言う。

呼吸困難になりそうだ。

「リオ様もそうだ。俺たちは存在しないはずの人間」

「それ…どういう…」

「言ったよな？名前は大事な物だって」

フロアは体を離し、瞳を見つめる。

「座つて。話すよ、全部」

ライファにベッドに座るよう促し、自分も隣に座る。

ドレスをぎゅっと握りしめ、その手を見つめた。

「教えて…この世界は一体なんなの？」

「ここは、無の世界だったんだ」

「無…」

ライファは繰り返し呟く。

「モノには全て名前が必要だ。だが、ここにはそれがなかった」

かつては何もなかったセカイ。

その中に産み落とされたモノ。

「それが俺だ」

フロアは低くそう言った。

「フロアはずっとここに居たの？」

「ああ。おもしろいだろう？真っ白な世界に在るんだ」
自傷したような笑い。

「俺は自分で自分の名前を付けた」

フロア。

それは、誰から与えられた訳でもない。
自分自身の名前だ。

「ここに居る全ての人間は自分で名前を付けてる。ライフアにも自分で付けると言ったらどう？」

「あ……」

思い出した。

ここに来て、まだ数日と経っていない頃。

『自分の名前だ。自分で決めればいい』

そう言った。

「あれ……そういう意味だったの？」

「ああ」

しかし、疑問が残る。

それでは自分はどこから来たのか。

「私も『無』だったのよね？じゃあ、『無』は何から生まれるの？」

「言っただろ？時と場所の歪みだって。解るか？時間と場所が一体になる所」

「分かんない……」

「じゃあ、逆はどうだ？」

「逆…？」

時間と場所が、歪む所。
それは…

「人の心だ」

第十二章

人の思い。
人の心。

「それらは全て歪みを生み出す。そこから生まれるのが『無』だ」
フローはライファの手を強く握る。

「元居た世界というのは、人の心の中だ。そこに帰れば、痛みや辛さを感じなくて済む」

「生きる事を、放棄しろというの？」

小さかったが、強い声。

ライファの声は決して強くはなかった。

だが、強い響きを持っていた。

「ライファ？」

「無から生まれて、私は個体になったわ。それを放棄しろというの？」

「生きるというのは…辛い事だ。他人と付き合^ひっていかなければならない。苦しみも感じる。君にはそんなことを感じる必要なんてない」

「違う」

ライファはフローの手を払う。

ベッドから立ち上がると、真っ直ぐに彼の瞳を見る。

そして、己の胸に手をあてる。

「私は生きているわ。それは紛れも無い事実よ！私の生を奪わないで」

苦しみも悲しみも辛さも全て。

それが生きている証だと知っている。
胸の痛みが訴えて来る。

自分はまだ生きたい、と。

「あなたは逃げているだけよ。辛い事や悲しい事から、目を逸らし
ているわ」

逃げたくない。

逃げてはいけないと、本能が叫んでいる。

「人の心に帰るということは、『死』を意味するのね？」

「……ああ」

「私たちの心から『無』は生まれてしまわないの？」

「分からない」

「そう」

ライファはそう言って、窓を大きく開けた。

涼しい風が二人の頬を撫でる。

「ぬえ 鵜
 殻」

「え……？」

フローは驚いてライファを見上げた。

黒かったはずの髪は、青へと変わっている。

それもフローのような銀がかかった青ではなく、深い青だ。

「和泉いずみ鵜。私の名前。……違うわね。私の居た心の持ち主の名前」

「思い…出したのか？」

「ええ。でも私は消えない。どうして分かる？」

ライファは穏やかに微笑む。

「私がライファだからよ」

第十三章

にこりと笑って。

「鵜は関係ない。私は私。私にも、心があるわ」

ゆっくりフロアの元に歩み寄った。

今度はライファが彼の手を握る。

「苦しい事も悲しい事も、恐れる事じゃない。少なくとも私は平気」

「強いな」

「フロアが居るからよ」

ライファはそつとフロアを抱きしめる。

小さな子供をあやすように。

「鵜は…性格が分かれてしまったの。一人は殺人衝動を起こす、殺人鬼になってしまったわ」

「そこが……」

「ええ。そこから私が生まれた。鵜と月^{ゆえ}、二人はお互いに気付かなかった。だから思いが歪んでしまったのよ」

一人の人間が気付かない二人の人格を持ってしまった。

だから、壊れてしまったのだ。

その崩壊を止めるため、ライファが生み出された。

「みんなが全てそうだとは思わない。でも、生きる事は逃げていい事じゃない」

鵜も月も。

互いに及ぼし合って、生きていた。

辛かったはずだ。

鵜も、月も。

知らない自分が居る。

分からない自分が居る。

自分が理解できない程の恐怖はない。

「恐怖の対象がないものに怯えている自分が怖い。ずっとそうだった」

フローはライフアを真っ直ぐ見る。

青い瞳が、黒い瞳を射抜く。

第十四章

「大丈夫よ」

ライフアは呟く。

その瞳は何者も恐れない。
強い、強い光。

「私は…いいえ、私たちは一人じゃない」

鵜は、戦った。

そして今はきつと幸せだ。
笑っているはずだ。

そう確信していた。

ライフアは鵜の半身だっかたら。

「だからもう大丈夫」

フローの手を取り、ライフアは微笑む。

「あなたを取り戻しに行きましょう？」

びくりと、彼は震える。

ライフアには分かっていた。

ここに居るフローは『フロー』ではないと。

理由など必要ない。

感覚がそう告げていた。

これは『本物』ではない、と。

「彼を返して頂戴」

ライフアの言葉が鋭く響く。

そして。

「それなら俺を殺さなくちや」

フローは冷たい笑みを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7378e/>

異名の境界線

2010年10月12日02時54分発行